

【論文】

日本語教科書と教授法への影響
— 中国高校日本語教科書作成を通して —

加納 陸人

On the Relationship of Japanese Language Textbooks
and Instruction as Observed in Japanese Language
Textbooks in Chinese High Schools:
Their Use and Influence on Instruction

Michihito KANO

要 旨 :

中国の中等教育では、ここ数年、従来の受験教育や詰め込み教育から脱却しようという動きが出ている。日本語教育においてもその動きに呼応し、時代に合った教科書が求められるようになった。本稿では高校教科書作成の指針になっている大綱（指導要領）の目的と教科書の編集方針、教科書の全体構成と作成意図・目的などについて触れ、教科書を使用した教師の感想や意見・問題点について言及する。現場の多くの教師には、当初、新しく作成された教科書を高く評価しながらも、新しい内容や大学受験との関係で、どのように対処したらいいか戸惑いも見られた。しかし、教師自身が教科書を使用していく中で、生徒のコミュニケーション能力の必要性や文化の大切さなどを強く感じるようになってきた。教科書が現場の意識に影響を与えているといえる。また、大学受験の出題項目にも変化がみられ、従来の暗記をすれば対応できるものでなくなってきている。ここにも教科書の意図が反映されている。

キーワード : 大綱、コミュニケーション能力、トピック、
教授法の変化、中等教育

1. はじめに

中国の中等教育における外国語は必修科目になっている。英語が中心で設置条件のある学校では、ロシア語、日本語が設けられ、第1外国語として行なわれている。

現在、中国の日本語学習者数（1998年国際交流基金調査）は、約24万人であり、そのうち中等教育における学習者は、半分に相当する約12万人ぐらいである。数の上では、英語が主流でロシア語がそれに続き、日本語は3番目である。

中国の日本語教育の中では、よく「三教」が重要であるいわれている。三教とは、「教師」「教科書」「教授法」のことである。特に教科書に対する考え方は、ここ数年、大きく変化してきている。これまでの教科書の問題点として、文法中心で、会話力、聴解力が養えない、日本の文化や社会に関する情報や日本人の生活を書いたものが少ない、ことなどがあげられる。また、内容も古く、時代感覚に合わなくなってきており、現場では、生徒たちがいかに日本語に興味を持たせるかが問われていた。

一方、日本の文部科学省に相当する中国国家教育部では1990年代半ばに、中等段階における教育改革の一環として学習項目や学習時間など、生徒の負担を軽減させる政策を打ち出し、日本語も他の教科と同様に新教科書を作成する方向で進められた。本稿で取り上げる高校の教科書は、上記のことがちょうど时期的に重なったといえる。

教科書作成後、現場では、その影響や教授法に少しずつ変化が起きてきている。本稿では、その変化についても触れたい。

2. 教科書作成の経緯

中等教育における日本語教育は、1972年の日中国交正常化以降、東北三省（遼寧省・吉林省・黒竜江省）、内モンゴル自治区を中心に始められた。現在でも、学習者の90%以上が上記の地域に集中している。その理由として、歴史的な影響で日本語を身につけた者が多いことや英語教師の不足、

朝鮮族にとっては学びやすさなどが考えられる。しかし、80年代初頭までは統一的な教科書がなかった。社会人向けのテレビ・ラジオ講座用のテキストや日本で出版された留学生用の教科書などをアレンジして使用していた。

1982年に国家教育委員会（現国家教育部）によって、中学・高校の学習指導要領にあたる『中学日語教学綱要』が制定され、教科書作成が始められた。そして、1983年から86年にかけて『初級中学課本日語（試用版全6冊）』（人民教育出版社）と『高級中学課本日語（試用版全3冊）』（人民教育出版社）が出版された。少数民族（朝鮮族・モンゴル族）地域では、上記の教科書に各民族の言葉で翻訳されたものが出版された。

90年代に入り、教育部から学習時間数などの変更が出され、当時使用されていた中学用教科書の改訂が行なわれた。1993年から95年にかけて『9年義務教育3年制初級中学日語（全3冊）』（人民教育出版社）が出版された。しかし、内容やレベル的には分量の削除と調整が行なわれた程度で、大きな改訂ではなく、当面の使用教材として位置付けられていた。

当時、教科書編集にかかわっていた課程教材研究所（教育部直属組織）は、80年代半ばに作成された中・高校教科書が時代に合わないものだと強く感じていた。特にコミュニケーション能力養成の面で欠けており、最新の言語学や教授法の研究成果を取り入れた教科書を求めていた。しかも、それは生徒たちがやる気を起こす魅力ある教科書で、よりよい言語環境を与え、最終的には、日本語教育のレベルアップをはかり、日本と中国の教育・文化交流の促進に貢献していくことを目的とするものであった。そして、日本側と中国側の共同編集という形で行ないたいという意向が出され、筆者のほうにも教科書作成の依頼があった。それまでの中国での中等教育の教科書づくりは、政治的な問題もあり、日本側が携わったとしても、せいぜい校閲レベルであり、執筆に携わったのは、今回が初めてのケースである。教科書作成は当初、中学から始め、高校へと進んでいく計画であったが、教育改革を早急に実施していく関係もあり、高校段階から始めら

れた。

1966年に国家教育委員会によって高校の学習指導要領にあたる『全日制普通高級中学日語教学大綱（試験用）』（以下「大綱」）が制定された。それにもとづいて、教科書作成が始まり、97年に1学年用『全日制普通高級中学教科書（試験本）日語』（人民教育出版社）が出版され、続いて98年2学年用、99年に3学年用、各学年の教師用指導書も出版された。同時に朝鮮語にも翻訳され、朝鮮語版が「東北朝鮮民族教育出版社」から出版された。

3. 大綱の目的と教学目的

大綱の冒頭には、次のように述べてある。

外国語は文化・科学技術を学ぶことであり、国際的な交流を進めたり、各方面の情報収集するための重要な手段である。また、外国語はわが国と世界各国の人々との友好事業及び経済・科学・文化交流の交流を促進し、発展させる上で、重要な役割を持っている。中華民族全体の思想・道徳的素養及び科学・文化的素養を高め、わが国を豊かで、民主的で、文明的な社会主義近代国家建設のために、「教育は近代化をめざし、世界に向け、未来に向けて」、理想・道徳・文化・法秩序意識を持ち、かつ、さまざまなレベルで外国語を習得した各方面の人材を大量に育成する必要がある。そのため、外国語を高等学校の基礎科目の一つとして取り入れるのである⁽¹⁾。

そして、教学目的として二つのことがあげられている。一つは、中学校段階の学習を基礎に、四技能（聞く・話す・読む・書く）の基礎訓練を行なって、口頭及び書面での日本語運用能力をはかり、更なる段階の学習と運用のための基礎づくりを行なうことである。もう一つは、日本語教育を通して、言語文化面での視野を広げ、思考能力を発達させ、文化的素養の向上に利することである。

また、この大綱には直接触れていないが、従来の「受験教育」から「素質教育」への移行がある。素質教育とは、受験のための詰め込み式の教育で

はなく、カリキュラムにゆとりを持たせ、情操面や個人の能力を伸ばしていく教育のことである。これは現在の中国における教育の基本的な指針になっている。

4. 編集方針

教科書の編集方針として、以下のことを考慮した。

- ①大綱にもとづき、中学と高校教科書に一貫性を持たせる。
- ②これまでの教材編纂の成果や日本語教育理論の研究成果を取り入れ、日本語の知識を体系的に、しかも螺旋状に組み入れる。
- ③生徒が日本語に興味を持ち、自然で美しい日本語を身に付けられるように、さまざまな文体や多種多様な形式を用いる。
- ④口頭や書面でのコミュニケーション能力が養成できるように、普遍的で実際に近い場面を設定する。
- ⑤日本の言語、生活習慣、社会、文化、科学、異文化交流、道徳性、環境問題、福祉など、あらゆるジャンルからバラエティーに富んだトピックを採用する。21世紀に学ぶ生徒たちにプラスになるよう教育効果を考える。
- ⑥多様な練習形式やイラスト・写真などを取り入れ、学習の助けにし、楽しく学べるように配慮する。

5. 教科書の全体構成

高校 1 学年用から 3 学年用の教科書（全 3 冊）は、以下のような構成になっている。

本文・会話文	1 冊目全 20 課 4 単元、2 冊目全 16 課 4 単元、3 冊目全 12 課 4 単元
本文解説・会話解説	
練習	聞き取り、絵を見て置き換え・文完成、言い換え練習、漢字練習、助詞の練習、日文中訳、トピックに関する作文・口頭練習、会話（絵を見て・文の言い換え）練習、ロールプレイ
コラム	1 冊目日本社会・日本人・高校生、2 冊目日本の伝統文化・行事・社会、3 冊目現代日本・社会・科学技術

付録1 読解文、語彙表、漢字表、助詞一覧表、文型一覧表、コミュニケーション用語一覧表、日本の歌
付録2 (3冊目のみ) 文法のまとめ、コミュニケーション用語のまとめ、文法練習、実力テスト(一)(二)、文型索引
教師用指導書、録音テープ

6. 本文について

6-1 本文の作成意図・目的

本文は素材(トピック)をもとに1課につき、1000字程度で書かれている。当初の計画では使用語彙を中学段階で約900語、高校段階では大綱内の語彙約1000語と考えていた。しかし、トピックにもとづいて、できるだけ自然に、しかも生き生きした表現となると、大綱内の語彙だけでは限界があり、大綱外の語彙数が全体の20%を超えないという条件で執筆にとりかかった。その結果、3冊全体の語彙数が1445語(大綱782語、大綱外547語、人名・地名116語)になり、数の上では少しオーバーしてしまったが、大綱外の中には使用頻度の高い語彙が多く入り、使える日本語を勉強していく上では、マイナスとはいえない。

文のレベルは高校生に合わせ、できるだけ分かりやすく、しかも興味を持てるような内容にしてある。ただし、中には読解能力を養うために、文脈が少し複雑にしてあるものもある。

文体は学習者のレベルを考慮に入れ、3冊目の9課までは「です・ます」体にしてある。「だ・である」体が出てくるのは、3冊目の10課以降である。また、男言葉や女言葉を避け、男女どちらも使用できるものにした。その中で、使用頻度が高く汎用性を持った表現になるように配慮してある。

文の形式は、だいたい以下に分けられる。

(a)記述文 (b)説明文 (c)紀行文 (d)物語 (e)手紙文 (f)日記

(g)スピーチ・インタビュー形式 (h)社説風叙述文

(i)座談会・討論会・雑談風 (j)伝記

本文を通じて、読解力や理解力、文法能力を高めるだけでなく、地球規

模でのグローバルな視野を養い、平和共存、異文化理解、環境問題、教育問題、社会福祉、科学など、人類共通の課題に目を向けさせるようなものを取り上げた。

6-2 本文トピックのジャンル別テーマ

本文のトピックで扱われている各課のテーマをジャンル別に分けると以下である。(冊目－課で表示)

(1) 日本語・文化・言語関係

「ありがとう」(Ⅰ冊目－6課)、「お風呂と温泉」(Ⅰ－12)、「日本語のあいまいさ」(Ⅰ－17)、「カラオケ」(Ⅰ－18)、「おばあさんと阿姨」(Ⅱ－1)、「わたしと日本語」(Ⅱ－3)、「お正月の料理」(Ⅱ－7)、「話し上手より聞き上手に」(Ⅱ－11)

(2) 環境問題・環境保護

「宇宙から見た地球」(Ⅰ－15)、「ごみ問題－わたしたちにできること」(Ⅱ－2)、「ソーラーカー」(Ⅱ－12)、「莫高窟－砂漠の中の世界遺産」

(3) 道徳・社会福祉・ボランティア活動

「携帯電話」(Ⅰ－2)、「三つのおの」(Ⅰ－7)、「電車の中で」(Ⅰ－8)「おばあさんの知恵」(Ⅰ－16)、「犬の洋服」(Ⅱ－5)、「試合よりも大切なこと」(Ⅱ－9)、「地震と高校生ボランティア」(Ⅱ－14)、「思いやりの旗」(Ⅲ－8)

(4) 国際交流・異文化理解・戦争と平和

「文通」(Ⅰ－9)、「同じ日に書いた日記」(Ⅰ－13)、「鑑真」(Ⅲ－1)、「思い出のホームステイ」(Ⅲ－2)、「お礼の手紙」(Ⅲ－3)、「将軍と孤児」(Ⅲ－12)

(5) 現代事情・科学技術

「ロボット」(Ⅰ－3)、「サラリーマンの暮らし」(Ⅰ－11)、「現金からカードへ」(Ⅱ－4)、「コンビニ」(Ⅲ－7)、「技術と人間」(Ⅲ－11)

(6) 課外活動・高校生活

日本語教科書と教授法への影響—中国高校日本語教科書作成を通して—

「日曜日の山登り」(Ⅰ-4)、「制服について」(Ⅰ-10)、「クラブ活動」(Ⅲ-5)

(7) 夢・友情・動物愛

「わたしたちの夢」(Ⅰ-1)、「頭のいいチンパンジー」(Ⅰ-5)、「ドラえもん」(Ⅰ-14)、「手品師」(Ⅰ-19/20)、「パンダと少年」(Ⅱ-13)、「思い出」(Ⅱ-16)

(8) ものの見方・知恵

「地球の形を知っていますか」(Ⅱ-8)、「植物の知恵」(Ⅲ-6)、「形には意味がある」(Ⅲ-10)

(9) 自然・冒険

「自転車世界一周」(Ⅱ-10)、「富士山—秋の風に誘われて」(Ⅱ-15)

(10) 中国の歴史・人物

「華羅庚の少年時代」(Ⅱ-6)、「香港」(Ⅱ-15)

7. 会話文について

7-1 会話文作成の意図・留意点

主な登場人物を固定し、上下関係や親疎、世代差、男女差などの人間関係による違いを念頭におき、以下のように設定してある。

《主な登場人物》

- | | |
|----------------|------------------|
| ◇周明 (男・中国人高校生) | ◇丁恵 (女・中国人高校生) |
| ◇三上 (男・日本人留学生) | ◇小川 (女・日本人留学生) |
| ◇白雲 (女・40代中国人) | ◇水谷 (男・50代日本語教師) |

執筆にあたり以下のことに留意した。

①一般的に高校生は中国国内で日本語を使用することから、会話の舞台を北京に設定した。日常生活で直面しているさまざまな場面を設定し、高校生が発話しやすいトピックを取り入れた。また、将来生じるであろう必要なコミュニケーション場面にも配慮し、コミュニケーション用語ができるだけ自然な形で発話されるようにした。

②自然な発話といっても、日本の高校生が通常話していることばづかいでは、教科書に載せる会話文としては問題が多く、終助詞「よ」「ね」なども必要最小限度にとどめ、汎用性の高い表現を追求した。

③一つの課を 1～3 段落で構成。1 段落の場合、20 行以内（18 センテンス前後）、2～3 段落の場合、各段落を 6～8 行以内におさめるよう心がけた。

7-2 会話文の主なトピックとコミュニケーション機能

会話文のトピックは、大綱にあるコミュニケーション用語をバランスよく入れる中で学年ごとに、コミュニケーション用語の難易度や登場人物の人間関係の変化を配慮しながら考えていった。中国の高校生と日本人留学生の出会いから始まり、高校生活のサイクルの中で、日常的な交流や活動が展開され、3 年後に日本人留学生が帰国するという設定である。主なトピックは以下である。

◇自己（他己）紹介 ◇家庭訪問 ◇誕生日パーティー ◇道案内 ◇夏休みの計画 ◇お土産の相談 ◇京劇に誘う ◇クラス新聞を作る ◇電話で誘う ◇空港への出迎え ◇日本のあいさつ ◇デパートの売り場で ◇作家の名前を聞く ◇本屋の場所を聞く ◇川掃除のボランティア ◇日本と中国の挨拶の違い ◇電話で新年の挨拶 ◇友達を気遣う ◇弁論大会に出場 ◇ビデオ録画の仕方を聞く ◇日中対抗バレーボール試合 ◇ボランティア活動の参加申込 ◇シルクロード展に誘う ◇新学期の再会 ◇留学生の家族が中国訪問 ◇ホテルで待ち合わせ ◇万里の長城のできごと ◇病院で診察を受ける ◇印鑑を作る ◇送別会への招待 ◇送別会のお礼 ◇空港での見送り

コミュニケーション機能は、大きく分けると 30 ある。その中のコミュニケーション用語は、165 項目である。コミュニケーション機能は、以下である。

挨拶と応答／天気／挨拶／招きと応答／訪問と応答／歓迎／紹介／別れ

を告げる／感謝と応答／祝賀と応答／賞賛と応答／お詫びと応答／請求と応答／勧め・提案／同意・賛成／遺憾・同情／禁止・警告・注意／心配・困難／非難・不平／疑問・懐疑／希望・激励／驚き・喜び／食事をする／道を尋ねる／買物／約束／伝言／電話をする／体調をくずす／注意を促す・同調する／聞き直す

8. 教科書を使用した教師の感想・意見

1998年にハルビンで行なわれた「中国中高校日本語教師研修会」（国際文化フォーラム主催）に1冊目を使用した日本語教師17名と座談会を開き、それぞれ感想や意見を述べてもらった。その中で出された主な感想や意見は以下である。

- ・本文の内容はとても面白い（ほぼ全員）。生徒の興味をひいている。特に日本の文化、日本人の考え方・生活などが入っているのがいい。ただ、文化的なことやコラムは、知識がないと教えられない。指導書で解説してほしい。
- ・コミュニケーション能力を高めるのにとてもいい教科書だが、授業をどうするか、教師のレベルが問題だ。各課のポイントや指導書、教案例があるといい。
- ・本文が自然な日本語を追求した結果、新出語（大綱外語彙）が増え、一段と難しくなった。中高一貫の高校では、中学校の教師も入れ替えて高校に来ることがあるが、教えるのが困難なケースもある。
- ・中学校の教科書と高校との連携がとれていない。1冊目（1学年用）が20課というのは多い。大綱では週4時間となっているが、最初の課は8時間かかった教師もいる。課が進むにつれて、慣れてきて1課を4～6時間で終えている。コラムを扱う時間がほとんどなかった。
- ・解説が詳しくない。文法項目が課によって偏っていて、急いで教えなければならぬケースがある。例文を中国語に訳すが、どう訳していいかわからない文もある。短くて分かりやすい文がいい。

- ・練習問題は簡単だ。重点校の生徒には難しい問題をやらせたい。選択問題は入試で必要なのもっと増やしてほしい。置き換えや入れ替えなど機械的に練習できるものは、あまり必要ではない。生徒は一度やった問題は二度としないので、本文に合った練習問題集があるといい。
- ・聴解の問題はとてもよかった。ただし、大綱外の語彙が入っているので、大綱内の語彙だけにしてほしい。作文の書き方（原稿用紙の使い方）や文の作り方も扱ってほしい。

同じ年に日中の合同編集会議が開かれ、中国側の主任編集委員からアンケート結果が発表された。このアンケートは、中国側が 1 冊目の教科書を使用した教師（21 人）からとったもので、主な感想・意見は以下である。

- ・教科書の題材が広く、内容が豊富である。思想性、科学性、面白さを備えている。生徒が勉強するのに興味をそそる。日本語を学ぶと同時に他の知識も学べる。本文の内容が科学的で斬新、面白く、しかも実用的で現代の社会生活に関係しており、改革開放の歩みと合っている。
- ・今までの教科書と違って、日本語らしい表現で構成されており、現実の生活に近い形でコミュニケーション機能が学べる。生徒のコミュニケーション運用能力を養う上でも、また、素質教育を行なう上でもとてもいい。
- ・会話とそのロールプレイは大変面白い。生徒がただ文法を勉強するだけでは、話すことができないので、ロールプレイのやり方がいい。会話はとてもいいので、できたらビデオをつけてほしい。
- ・文法の解説は詳しくて本文と統一性がとれている。文法項目がはっきりしており、従来の教材と比べ充実している。重点項目や難しい項目も分かりやすく書いてある。
- ・本文のあとの文法知識（慣用表現）の解説は簡単すぎて、生徒にし理解しにくい。例文が多いので、それに対応した訳文が必要だ。類義語についても解説してほしい。ロールプレイは多すぎないか。その分、作文を増やしたらどうか。手紙文の書式、作文の書き方も詳しく説明してほしい。

い。

- ・総合練習問題が足りない。読解、聴解の問題を増やしてほしい。読解文を理解する上での設問、助詞穴埋め、選択問題の充実が望まれる。中文和訳、日文中訳の練習も多いほうがいい。

9. 現場への影響と教授法の変化

現場の教師たちは、上記の感想にも見られるように教科書を高く評価しながらも、大学受験との関係で不足点も感じている。教科書が従来の文法中心からコミュニケーション重視に重点が移ってきたが、現場ではすぐに対応ができなかった。1996年、長春で開かれた「中高校日本語教師研修会」の教科書に関する講座の中で、ほとんどの教員や教師が会話文は不必要だと唱えた。受験勉強には邪魔だというのである。しかし、実際に教科書を使用する中で、会話文、つまりコミュニケーション能力の必要性を感じるようになってきた。教室の現場では、当時、現地の教師から一度も耳にできなかった「ロールプレイ」という言葉が、現在では当たり前のように使われるようになった。

そして、教授法にも新しい視点が加わった。1998年の「中高校日本語教師研修会」の模擬授業（王健英）では、本文「日本語のあいまいさ」の中で、日本語的な「ちょっと」という使い方を中国語の「あいまい」表現との比較の中で生徒たちに考えさせる授業をしていた。また、「文化を取り入れた授業」の発表（劉淑艶）の中で、本文「お風呂と温泉」を取り上げ、異文化理解とコミュニケーションをどのように取り組んでいるかが報告された。これらは、従来の暗記型や詰め込み型の授業では見られない新しい傾向といえる。

また、高校の日本語教育は大学受験の比重が大きいが、出題項目にも変化がみられるようになった。1998年より「作文」、2001年より「聴解」が加わった。今回作成された教科書も作文と聴解には練習を割いている。教科書が大学受験の出題にも影響を与えているといってもいい。

10. まとめ

今後の課題はいくつかあるが、その中でも教師養成が急務になっている。教科書をうまく使いこなしていくには、何よりも現地教師の日本語力、教授力の向上が必要不可欠である。学校の格差や教師のレベル差も大きい。その意味では、現地での教師研修会や日本での研修の充実が望まれる。

今回作成した教科書は試験本であり、今後、教育部の検定にかけられる予定である。現在、中学校の教科書作成が始まっており、中学と高校が連動し、一貫した教科書ができあがった時、中国の日本語教育はまた一步前進しているであろう。

引用文献

- (1) 国家教育委員会 (1996)『全日制普通高級中学 日語教学大綱』(供試験用) 人民教育出版社

参考文献

- (1) 張国強 (1993)「東北三省が中心一整備進むなかで教師不足、生徒の減少がづく」『月刊日本語』(1993.9) アルク
- (2) 唐磊 (1997)「《全日制普通高級中学教科書・日語》簡介」『試教通訊』(第 6 期) 人民教育出版社
- (3) 加納陸人 (1997)「高校第一冊の本文・会話文について」『試教通訊』(第 6 期) 人民教育出版社
- (4) 人民教育出版社 課程教材研究所外語室日語組編著『全日制普通高級中学教科書 (試験本) 日語 第一冊』(1997) 人民教育出版社
- (5) 人民教育出版社 課程教材研究所外語室日語組編著『全日制普通高級中学教科書 (試験本) 日語 第二冊』(1998) 人民教育出版社
- (6) 人民教育出版社 課程教材研究所外語室日語組編著『全日制普通高級中学教科書 (試験本) 日語 第三冊』(1999) 人民教育出版社